

津田仙の『農業雑誌』と地域への広がり

—明治10年代と20年代の読者に注目して—

加納弘勝

はじめに

津田仙と発起人が創設した「学農社」は、3つの事業、(イ)農学校の運営(明治7~17年)、(ロ)西洋苗種の販売、(ハ)「民間自由の一大農誌」として『農業雑誌』を発行し(明治9年~大正9年)、「農は百工の父母」(『学農社制規』)(後述)と「自由を重し」とする「物産興隆の道」を追求した。

学農社の3つの事業は概して成功した。農学校は、卒業生を各地の勸業課に送り出して新たな農業を指導し、種苗の販売は、各地に果樹栽培や種苗農家を出現させた。『農業雑誌』は、寄稿する多くの読者を持ち、読者は、読者からの問いに答え、事業や「実験」を寄稿し、「新しい技術・知識」を共有し新たな時代への対応を模索した。『農業雑誌』の地域への広がりには、「農は百工の父母」と「自由を重し」に共感し、濃淡はあるにせよこれこそ自分たちの営みと見なし、生活する「地域で(津田仙や学農社の思いを)繋いだ」読者の活動によって強まるといえよう。

学農社の3つの事業が、二つの時期、すなわち、明治初年より14年の政変ころまでの流動、そして松方デフレ政策を経験した10年代と、23年の帝国議会の開設を経て27年の日清戦争に至る20年代に、どのように発展し変容したのかを、寄稿した読者の約9400名(延べ人数、延べ寄稿回数)をもとに、量的に分析し、また、読者の活動を質的に分析し整理する。

『農業雑誌』の読者に注目した研究は、1970年前後に公刊された。『近代日本農政思想の研究』(1962)は、支持基盤を検討し相馬愛蔵や竹内泰信(伝田, p.201)などに触れ、淡路島に寄稿者が

多いと指摘した(伝田, p.197)。色川は、南多摩の豪農民権家、細野喜代四郎が明治12年の読者と発見した(色川, p.42)。

津田仙に焦点を合わせた研究も、1970年前後に公刊され、内田紘は農学校の活動を検討した(内田, 1965)。仙夫妻の洗礼(受洗)に触れ、「幕臣とキリスト教」という興味ある指摘がなされた(青山学院, p.58)。『津田仙——明治の基督者』(1972)も公刊された。

2000年代に入ると、津田仙に関する著書は再び増加し、2003年には『津田仙と朝鮮』が出され、明治15年、「壬午軍乱」で宮廷に影響をもった李樹廷が津田に出会い、キリスト教について教えを受けたと指摘する(金, p.116)。『農業雑誌』(明治15年10月15日号、以下M15.10.15と略)は、「壬午軍乱」で命を落とした水島義が、「12年に我が農学校に入り助教授となり学生を訓導し、4月に「公使館附雇」となり「該国の牛種」を研究する意図であったと伝える。また、2008年には、『津田仙評伝』が出され、学農社の多くの学生名(高崎, p.63)を記し、津田と交流のあった地方の人たちに触れた。

2012年には『津田仙の親族たち』が出され、米国で「ことに農家の裕福」を実感したと記した(津田道夫, p.16)。2013年には、とうもろこしの「通信販売」に触れ、「物珍しさを追いかけた」と紹介した(並松, pp.102-3)。2000年代には、再び、津田仙と『農業雑誌』に関心が高まったといえよう。

『農業雑誌』に寄稿された内容から、あるいは、明治期の列伝論やその後の出版物、2000年以降に拡充された地方自治体などのネットに公開された「郷土の偉人」などから、『農業雑誌』を地域で

繋いだ人々の、多様で異質な、そして多数の活動を具体的な形で知ることができるようになった。

明治から戦前の出版物、『郡誌』や『人名事典』などについては、とくに記載しない限り、本文中に書名、発行年を記すに留めた。明治の出版物は、多くが「国会図書館」のデジタル・サービスで閲覧できる。

分析枠組み——「五角形の枠組み図」をもとに

第1に、『農業雑誌』の地域への広がりを検討する量的な分析は、明治10年代と20年代における『農業雑誌』の販売店所在地とその推移、また、農学校に集まった「発起人、教師、塾生、通学生、通信員」（以下、「卒業生」と略）の県別分布を検討し、2つの時期における『農業雑誌』の読者の数と居住県、その推移を検討する。

なお、「学農社社員録」（M16.6.30）の記載（巻末に記載）は、明治8年9月から9年4月までに「学農社へ入社」として144名をあげ、このうち139名の出身地も示す。なお、国会図書館所蔵の『同志』（デジタル版）では、該当部分が白紙で表示され確認できない。

第2に、『農業雑誌』の地域への広がりを検討する質的な分析は、学農社に集まった3つの集団、すなわち、学農社農学校の「卒業生」①、10年代の読者②、20年代の読者③の具体的な活動を検討し、個々の活動を「五角形の枠組み図」をもとに組み立てて整理する。

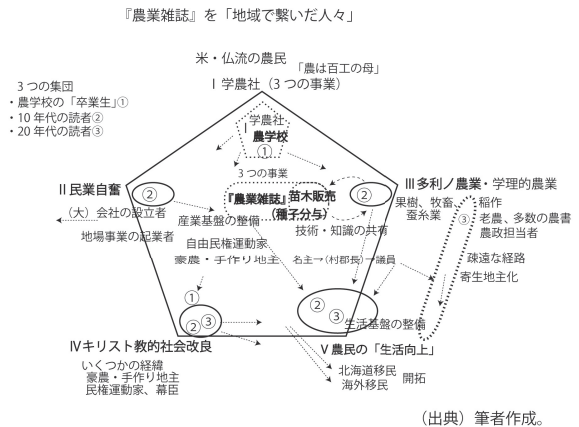
「五角形の枠組み図」は、津田仙を支えた5つの基点をもとに構成できる（第1図では5つの頂点）。基点Ⅰは、学農社であり、なかでも発信元となった農学校であり、小さな破線の五角形で示す。基点Ⅱ（図で左上）は、津田が「自由を重し」と官位には無縁を貫き求めた、「物産興隆の道」としての「民業自奮」である。基点Ⅲ（図で右上）は、「欧米の運」をもたらすために農民に勧めた「幾多の収納」、「多利ノ農業」や「学理的農業」である。

基点Ⅳ（図では左下）は、津田が追求した「キリスト教的社会改良」であり、伝道、社会改良の活動を含む。基点Ⅴ（図では右下）は、国民の大半を占める農民の「生活向上」を意味し、「米・仏流の農民」に近づくことである。Ⅴ農民の「生活向上」は、Ⅲ「多利ノ農業」や「学理的農業」によって、また、道路、鉄道、学校など生活基盤の

整備によって実現される。

Ⅴ農民の「生活向上」が実現されれば、農民（図では、右下の大きめの円）は「米・仏流の農民」に近づき、五角形のより内側に移動し、Ⅰ学農社との距離は狭まる。基点1～Ⅳから農民への働きかけが、苗木販売や「種子分与」を含めて『農業雑誌』（図では中央の破線の長い丸角四角形と円）を経て進み、農民も働きかけに応えたとき、『農業雑誌』の地域への広がりは強まり、逆に、農民への働きかけが、学農社と別の経路、あるいは、疎遠な経路（図では破線の細長い楕円）を経て進むとき、地域への広がりは狭まるといえよう。

第1図「五角形の枠組み図」



1 学農社の活動と『農業雑誌』、地域への広がり

(1) 津田仙の成功体験と3つの事業

明治6～14年に、わが国は圧倒的に優越した列強の生産力と軍事的野心に脅かされ、しかも封建制の処理と内乱の代償たる財政危機の難問に直面した。『農業雑誌』の創刊号は、次のように言う。「今や…輸出は常に輸入を償わず、月々我れに百万円余の損失あるを聞く。…今や我国勤むべき秋なり」（「編纂大意」(M9.1.1)、巨大な負債を指摘し、「我国の将に自滅せん」と危機感を示した。「物産興起」には、農業を興すことが第一である。農業を興すことは、最緊最要の事であり、「農は百工の父母」とした（津田仙、『学農社社規』、明治8年9月、自筆原稿）。

「国の貧富は人民の方向如何に由る」(M12.2.25)では、人民の方向とは、農業に携わる人民がもつ土地のことであり、土地には農耕に尽くす労働農具の多少が含まれる。人民の方向如何が「物産興

隆の道」に影響し、一国の富の量を定める。物産用の資金すら軍備に費やして、「やむを得ず人民の膏血を絞り怨嗟の声」を国内に生じさせる形で、国をなりたたせてはいけない。「人民の膏血」すら絞る国として普・露をあげる。逆の国として、仏・英・米の三国を挙げる (M12.2.25)。なかでも仏は、普に敗れながらも繁栄し、農事を奨励して下級の農民ですら6エーカーの土地を持ち、米は農民がもっと土地を持つ。英の農民にも触れるけれども、具体的な指摘は無いため、以下では「仏・英・米の」でなく、「米・仏の」と記す。日本の農民の手本は米・仏にあり、米・仏のような性格をもつ「農を得て、民工を興す」(『学農社制規』)ことが、日本帝国に真の繁栄をもたらすとした。

農民の耕作面積をすぐに増加させることはできず、米・仏流の農業を日本で行うために、「多利ノ農業」を農民に勧める。津田仙には2つの原体験があった。原体験の一つは、慶応3年、佐倉藩士の津田は幕府の「外国方」として米国に派遣され、「米国文明の深層を看破したと、明治政府に仕えるを潔しとせざりしより、断然帰農し、一農民として日本農業の革新を志した」(「津田初子刀自葬」、『護教』M42.9.4)。「農業の発達に貢献することをもって、自らの天職」(津田昇、『津田仙翁略伝』, 1958)と考えた。

もう一つの原体験は、明治5年、アスパラガス等の西洋野菜を栽培し、横浜の居留地の外国人に販売し、「農業の利潤多く斯のごとし、夫れ莫大也とは」思っ て見なかった。「是より一層農学に志を注がしめたる」(M15.2.18)と、「多利ノ農業」への確信を強めた。

明治6年のオーストリアの万国博に派遣され、オーストリアの荷衣伯(ホイブレン)に出会い彼の著作を翻訳して『農業三事』を出版し、大好評を得た。小倉の里見義は、明治9年に、「『農業三事』を読み、農事の盛に興ることを祝いて」(M9.2月と記載, No.4)と、和歌を寄せた。育徳館で和学を教え「埴生の宿」の作詞者であった。

学農社は、第1の事業として、明治8年に農学校を創設した。創設時には福沢の慶応義塾などと並び称され、駒場農学校に先行した。14年には教師10人、生徒175人を数え、創設から閉鎖されるまで695名が学んだ(内田, p.51)。本科は卒業に3年、予科は期限がなく、通信員は住所の遠近に関わらず入社式を経て入社金を支払い、農事を

問うことができた(『学農社学校規則』, 明治12年)。14年を境に、駒場や札幌の農学校が確立し就職機会が提供され、松方デフレ政策のなかで生徒数は減少し17年に閉校となった。

学農社は、第2の事業として、苗木販売を行い、後に、『農業雑誌』に「種子分与」の欄を設けた。寄稿者が急増した明治24~27年、「種子分与」欄を別に集計した4年間(25年を除く)では、「種子分与」の寄稿者は年平均で延べ401人、一般寄稿者686人の約59%を占めた。学農社は10町歩に及ぶ農場を有し、『農業雑誌』は苗木・種子の広告を掲載した。

青森リンゴの先駆者、菊池楯衛は明治10年代に学農社からリンゴ苗を買い入れ(後述)、新潟の10年代の読者、柳道太郎も「貴社から葡萄苗3本を購入した」(M13.2.11)と報告した。しかし、学農社の苗木は高く大量には売れなくなった。17~19年には、各地に苗木業者が成立し、官営試験場が確立し、新種苗木の全国的配布が一応の完了したために、学農社の西欧苗木を特別には必要としなくなった。

学農社は、第3の中心的事業として、明治9年に『農業雑誌』を創刊した。雑誌の発行でも、津田仙たちは誰からも援助を受けなくて、独力で事業を行う、「民業自奮」を貫いた。「吾社のほかに大助力者なくして、而も官省特別の保護を受けくるものと、よく相ひ拮抗する者は、愛国と熱心に忍耐」(「陳言一則」, M17.7.12)によるとし、「自由を重し」とする人にむけ、「民間自由の一大農誌」を創刊した。

『農業雑誌』は、最初は月2回の発行であり、明治13年より月3回の発行となった。発行部数は、19年の再刊号(M19.7.3)によれば、「平均4~5000部を下らず」であった。「内務省図書局年報」では10年と11年の発行部数は、月2回発行として約2800部になる(小池, p.40)。しかし、松方デフレ政策のなかで17年9月から12月末まで休刊を強いられた。18年も14号を発行したに留まり、19年7月に再度刊行が始まった。なお、『農業雑誌』の英語名「The Agriculturist」は、18年末まで記載はなく、19年1月から記載され大正9年12月に除かれた。

(2)『農業雑誌』、地域への広がり——販売店、「農学校」卒業生の出身地、読者の所在地
『農業雑誌』を扱った販売店は、『農業雑誌』の

地域的な広がりを示す。明治14年末には、記載された販売店109店のうち、東京が半分以上の56店（全国の約51%）を占め、北海道5店、宮城4店などが次に多かった（第2図参照）。20年代に読者が急増した長野や埼玉、群馬には無かった。明治27年末になると、販売店127店となり、東京は12店（全国の約9%）と減り、群馬11店、埼玉9店、長野5店、福島5店に増えた。

「明治8~9年入社」の学農社「卒業生」①144名のうち139名の出身地域は判明し、全国から集まった。県別の出身者数は、東京が11名（全国の約7.6%）で福岡は最も多く14名である（第2図参照）。日本海側の福井5名、石川7名、新潟8名と多い。

第2図 地域的広がり、卒業生①と読者②③



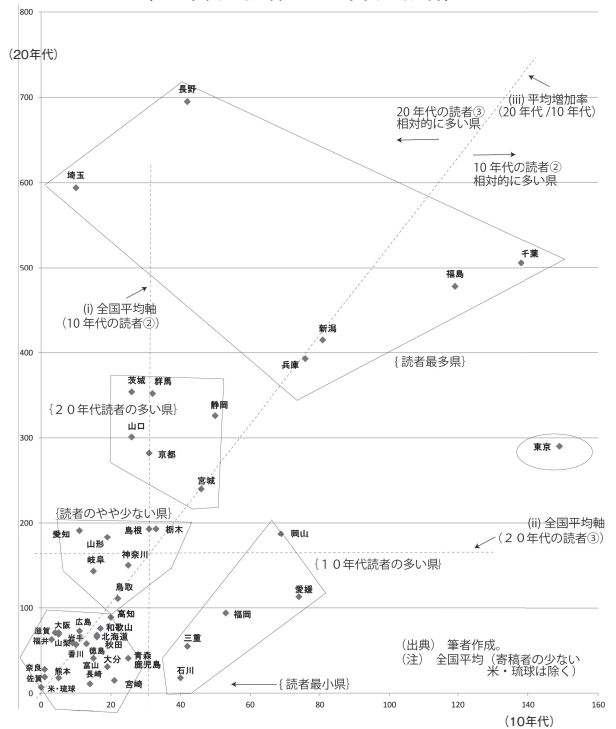
『農業雑誌』の読者（寄稿者の延べ人数・回数）は、明治10年代にも20年代にも増加を続けた。創刊初期の9~14年までは年平均で約60名であり、10年代後半には約230人に急増した。20~23年には約770人に増え、24~27年にはさらに約1120人に急増した。

『農業雑誌』の読者は、読者の多少、および増加の遅速から、大きく5つに分かれる（第3図参照）。10年代の読者②全国平均軸（破線の縦軸）より、右の県は10年代に読者が多く、左の県は少ない。また、20年代の読者③全国平均軸（破線の横軸）より、上の県は20年代に多く、下の県は少ない。平均増加率の軸（破線の斜めの軸）は、10年代に対して20年代の読者が増加した遅速を示す。斜めの軸より左にあれば、20年代に読者がより速く増加したことになる。

5つのまとまりのうち、第1は、長野や千葉な

どの読者最多県である。斜めの軸の右にある千葉や養蚕の福島は20年代の増加は遅く、左にある長野や埼玉は養蚕県で20年代の増加が速かった。第2は、20年代に読者が2番目に多い県で、養蚕の群馬や茶業の静岡などが属し、いずれも20年代の増加は速い。第3は、10年代には読者が比較的多かった県で、果実栽培の愛媛や卒業生①の多かった石川が属す。第4は、2つの時期とも全国平均前後やわずかに下回る、読者のやや少ない県で、愛知などが属する。第5は、読者最少県で、北海道や大阪などが属する。東京は、これらとは異なり10年代に読者が全国で最も多かった。

第3図 読者の県別分布 (10年代の読者と20年代の読者)



(3)『農業雑誌』の描いた農業像

(i)『農業雑誌』で津田仙の描いた農業像

農業を興さざれば、「我国將に自滅せん」。しかし、慣習のなかに埋没した農民は、作物畜類を改良する新時代の農業に決して目を向けない(M13.2.11)。「耕作の労苦を除き、一夫百頃(1000)の地を耕して以て許多の収納を」(「農具改良論」, M12.8.25)もたらそうとすることが重要であり、労働の労苦が取り除かれれば、「許多の収納」を求め農業を行おうとする人も新たに現れるとした。

「人民の方向如何に由る」は、次のように言う。

日本中を開拓し、地味に従って「小麦を蒔き、とうもろこしを栽え、果木園を仕立て、…牛、馬、豚の類を飼育せば、国家の隆盛」(M13.2.25)は間違いない。畑作農業を他面から牧畜業が支える。明治15年には「牧畜を蓄殖するは、今日に急務なる説」(M15.6.10)を掲載した。明治18年の同誌(M18.6.15)では、「利を多く収むる」農業と表現し、「許多の収納」を求める農業とは、大久保農政の「多利ノ農業」とほぼ同じであり、「利を多く収むる」を的確に伝えるため、Ⅱ「多利ノ農業」を用いる。

維新以来、商工に比べ農業が発展しないのは、「学理を農業に用いる」姿勢が欠如するからである。「学理的農業」を農民に勧め、農民に進取の精神を要求した。農民が旧来から信頼する農術は個々の成功を集めたにすぎず、成功に必要な「隠微なもの」には目をむけない。「隠微なもの」を知らなくては、「十分な収利」を得ることは無理である(M14.6.18)。

日本に米・仏流の農業を作り、富裕な農民を創設する手段として殖民論を主張した。「日本帝国にも亜米利加合衆国あり」(「北海道開拓新論」M12.7.25)とし、北海道こそ興農富国の道があるとみなした。殖民論には、学農社の一貫した姿勢が現れる。北海道の開発を望んだ官為の事業は、官員を養い外国人を雇うに終わり効果がなかった。逆に、「民為の事業挙るあらん事をこいねがわん」(M12.7.25)。諸産業の発展は、「政府が干渉せず、人民の自奮自起を補助奨励し、人民の利益ある事業」を勧めることにある。民業の自奮がない産業発展はすぐに崩れるとし、Ⅱ「民業自奮」を主張した。

「日本帝国に豪農なし」(M13.3.20)では、「手を農耕に下さるときは、未だ容易に豪農の二字を与えるをなさず」とし、小作に出し徳米を倉庫に納めるのは、「質屋・貸金屋」にすぎないと、寄生地主を否定した。手作り地主の大経営と生産的諸技術改良を基本とし、その周辺に中小農民が集落をなす、農村を求めた。

(ii) 3代の編集長が描く農業像とその後の学農社

明治18～21年頃の編集人、巖本善治は、9年に上京し中村正直の同人社で英語や自由主義を学び、13年入学のⅠ卒業生①で、17年に下谷教会で受洗し、一連の論説を展開した。「開農小策」では、日本農民の大習慣は「利を多く収むるの志」

を知らないで、「必迫せる切要の産物」を産出するにすぎない。最大の原因は、産物の大半を重税苛租に取り立ててきたことであり、日本農民を開導する第一の策は「進取の気性」を発達させ、「多利を取る」を望ましむことである(M18.4.15)。「小作制について」(M17.5.31)では、「地主が専横の権を握り、与奪」をほしいままにし、小作人は安心し生産に励めないと、日本の社会構造に目を向けた。

学農社の論説欄を、高橋要亮と足立五郎作が引き継いだ。高橋は、千葉出身で明治16年に卒業し(M16.6.30)、21年に「農者はなぜに商工者に及ばざる乎」(M21.11.5)と問い、「封建制以来、国税の義務は独り農民の負担」としてきた。明治になっても封建の余弊を受け「負担甚だ過重」である。生計に余裕がないため「空しく祖先の遺業を墨守し、進んで利益ある業務と作物を選びとり、之を転換するの知見なき」(M21.10.25)に陥っていると、地租軽減に改革の鍵を見た。

足立五郎作は、明治13年に「実学上の学問を修める」ためなら上京を許され、「津田仙氏の学農社に入り農学の緒」を開いた(『岳陽名士伝』, 1891, p.836)。17年に農学校が閉鎖されると、18年に札幌農学校に入学し、卒業後、学農社で論説を担った。しかし、25年には足立の訃報が掲載された(M25.10.5)。足立は、地主と小作の関係で、すぐにできることとして、「地主は旦那ぶりをやめて、純然たる農夫」になることとした(M23.2.15)。地主の寄生地主化に反対し、地主と耕作農民が利害を共有できる農業を主張した。

学農社は、「民業自奮」を主張し続け、華族保護政策と諸産業の保護政策を批判した。この時期には官設鉄道の華族に払い下げがなされようとし、払い下げは「国家に、ことに農民に」利害が大きく関わり、農民も反対の声を上げねばならない(M22.7.5)。鉄道は、「農民が辛苦の汗」から支払った地租によって建設されたものであり、鉄道から得られる恩恵は農民に帰されるべきである。にもかかわらず、政府は「富貴栄華を極むるの華族」に与えようとしている。農民は鉄道払い下げに反対しなくてはならないと主張した。

農商務省の「保護政略が民業を妨げている」(M23.5.25)と非難した。特定の人に保護を付与することは、「自立の精神なき人に起業の依頼心」を生み、「誠実な事業家を害し、ついに国家全体の民業を衰退せしむ」と批判した。紡績資本が明治

25～26年ころに外国綿花への切り換えを行ったため、学農社は耕作農民の側から、「綿花輸入税廃止の失計たるを論ず」(M26.12.25)と、明確に政府を批判した。

明治27年7月に日清戦争が勃発し、前後して挙国一致体制ができ国家主義が強まった。同時に、地主層は寄生地主化し、耕作農民一般と利害が一致しなくなった。日清戦争は義戦と国民は浮かれ、学農社も義戦と考えた。真の挙国一致体制を構築するために、「実業者各職に安んずべし」(M27.8.15)とし、国民に対し経済活動に励めと勧めた。しかし、学農社は挙国一致体制に巻き込まれ、「民業自奮」など独自の主張を表明しなくなった。

明治30年に津田仙が学農社より引退し、41年に死亡した。30年代には『農業雑誌』に変化が生じた。学農社の説いた西欧農学は、この時期には勸業課などにより修正されつつ農業知識として常識化し、新鮮さを失った。30年代後半には、大半の論考を学農社と関係のほとんど無い農学者、農業技術者が行い、例えば、44年5月1号の寄稿者は農学士7名、官吏技術者5名、農事試験場見習1名、地方寄稿者1名などであった。知識を中央から地方に流すことが強まり、地方からの寄稿は俳壇などに限られた。学農社とは疎遠な経路や別の経路(第1図の右下、細長い楕円)で農民に働きかけがなされることになった。

2 地域で繋いだ学農社卒業生①の活動 ——5つの基点にもとに

1では、『農業雑誌』の地域への広がりをも量的に分析した。2～5では、『農業雑誌』を支えた3つの集団が行った活動を、「5角形の枠組み図」により検討する。卒業生①の活動は2で述べ、読者②③の活動は、基点Ⅱ～Ⅳごとに分けて3から5で述べる。

I学農社を基点に、卒業生①は、Ⅲ「多利ノ農業」を(イ)地方の農事試験場で指導し、老農も「学理的農業」を指導し、(ロ)果実、茶、蚕業で自ら実施した。(ハ)Ⅱ「民業自奮」を会社設立で進め、産業基盤(鉄道など)を整備した。(ニ)V農民の「生活向上」を生活基盤(電気や水道など)の整備で進め、(ホ)Ⅳキリスト教的社会改良を行った。なお、幾人かの卒業生①については、第2

図に名称を記した。

(イ)農事試験場で指導

★宇喜多秀雄は、旧高松藩士であり、県令の薫陶依頼を得て明治8年I学農社に入学した(宇喜多翁…, p.12)。卒業後、愛媛県の勸業課に勤め、農民に新技術農業を伝えた。V農民の「生活向上」のため北海道殖民を奨励し、24年に北海道を視察した(宇喜多翁…, p.51)。27年頃に愛媛に戻り、「民業を發達させるためには交通の便をさきにしなければならない」との要請を受け、讃岐鉄道株式会社の支配人となり、Ⅱ「民業自奮」のために産業基盤を整備した。一方、北海道殖民は、30年に弟の秀夫が5戸22名を連れて移住し、十勝の原野に宇喜多農場ができた。大正5年には「学農社」の社長を引き受けた。

★渡辺讓三郎は、新潟の出身で学農社の教師であり、明治9年に石川県から入学した杉江秀道が帰郷して懇請し、杉江の開設した「農事社」の教授となった。杉江は「学農社」で学んだことを、地域に伝えようとした(石川県教育…, p.353)。9年末に「石川県勸業場」に農学科が創設され、杉江とともに教授となり農業の実践教育を行った。

★滝七蔵は、鳥取に生まれ、明治14年設立の「郡立久米河村農学校」の専任教師として赴任し、14～17年まで在職し、津田の『農業新論』や『農業三事』を教科書とした(『鳥取県果実…』, pp.65-9)。20年に発足した鳥取協同会の中心メンバーで政談講演会の常連として進歩的思想を訴え、翌年に攻学館を創設した。

★福羽逸人は、島根に生まれ、「三田育種にあって重要樹苗の育苗配布」を行い、明治13年に播州ぶどう園が創立されると、卒業生①の片寄俊とともに園員に任命された(三宅, pp.330-3)。16年に園長心得となり、市街地近くに荒れた畑地が残るぶどうを植えれば高額で売れると、Ⅲ「多利ノ農業」を推進した。

★水原政次は、三重で生まれ、明治10年に「東京三田育種場、学農社に入る」前から「地方の人々に先んじて京阪地方より種子を購入」(『全国篤農家列伝』, 1910, p.143)した。「社員録」にはないけれども、『列伝』によれば、I卒業生①であった。三重に栽培試作場ができると栽培試験の任にあたり、上級学校に行けない農民に専門的な知識や技術を分かりやすく伝え(大坪, p.144)。「県農業界の中心」となった。

老農として指導

★奈良専二は、香川県に生まれ、明治の三老農の一人である。明治9年に入社（54歳のとき）し、「社員録」に「奈良専三（香川・農民）」と記される。「農をもって国を興す」という大志を抱き、碎塊器などを考案し実地の指導者として活躍した（永原, pp.108-10）。16年に60歳で上京し、18年から千葉などでⅢ「学理的農業」を指導し、執筆活動を続けた。23年に秋田県花館村で果樹栽培を指導し、郡内初の耕地整理を進め、秋田で永眠した。

明治三老農の一人、中村直三は奈良から寄稿した（M10.1.25）。明治になって、種子を蒐集し試験園で良種を確認した種子交換で知名度を高めた。14年の国内博覧会に出品し、添書きに良種を得て土地を集中した者は地主となり、恵みは「小民・貧農商」に及ばずと記した（永原, pp.104-6）。

(ロ) 果実や茶、蚕業で自ら実施

★橘仁（改名前は甚兵衛）は、加賀藩領で村の大庄屋格の家に生まれ、「学農社にあって数年間園場現業の管理」（M26.9.25）を行ない、この農場で新品種の作物育成法などを学び、「11年前」（明治15年となる）に学農社を辞し北海道に渡った。「2町歩ほどの土地」を得て果樹栽培、とくにリング栽培を開始し26年には「700本で結実し、値段甚だしくよろしく」と津田に伝えた。家族による「林檎の碑」の碑陰には、「仁は東京に於て津田仙氏の学農社に学び、「仁没と共に林檎園は消滅」と記され、Ⅳ札幌独立キリスト教会を設立した1人であった。

★坂三郎は、沼津町に生まれ、養家の茶園の経営に当たった。坂の家は「売茶をもって業」とし（『岳陽名士伝』, pp.1282-3）、以前からⅢ「多利ノ農業」を進めた。慶応2年から明治16年に、「40余名の職工を山城及び近江から招き、自家製造の傍ら宇治製法を地方茶業に伝習させた」（『静岡県茶業史』, 1926, p.1291）。10年には外商が茶を買いたくのに反発し「積信社」を設立し、「直輸事業」を試みた。この直前の9年に入学した卒業生①である。11年には茶業集談会を設け、静岡県茶業の中心的な役職を果たした。しかし、直輸事業は思うように進まず、16年に閉社となった（『沼津市史 資料編近代Ⅰ』, 1997, p.385）。

★小柳津忠民は、愛知の生まれで明治22年に寄稿し、息子の友治は卒業生①であった。忠民は、

6年の私塾廃止令が出され村内に教育機関がなくになると、Ⅴ農民の「生活向上」のために自費で教師を招き「一義校を邸内に創設し、多数の児童を収容した」（『忠民翁』, 1911, pp.4-5）。16年まで「近江、岩代」から桑苗を購入・配布し「この地方の桑苗を大いに改良し」（『東三河産業功労者伝』, 1943, p.158）、Ⅲ「多利ノ農業」を養蚕業で進めた。21年に「養蚕義社」を設立し、「私費を投じ養蚕模範場を各地に設置」し伝習生を指導した。

明治11年には、農業の改善進歩を図るには、「学理の力を頼らねば」と長男、友治を「学農社」に入学させた（『功労者伝』, pp.159-60）。忠民は、21年に『蚕桑要論』などを公刊し、津田も序文を寄せた（M21.8.5）。28年には、18町歩に及ぶ「除虫菊園」を営み、「外国産駆虫粉」を駆逐し有志と株式会社を設立して除虫菊栽培に務め、Ⅱ「民業自奮」を進めた。友治も26年に養鶏場を始め、数年で「本邦屈指の大養鶏場」に拡大させた。

(ハ) 会社の設立で

★小笠原長道は、宇和郡に生まれ、明治9年に愛媛県は勸業課を新設し蚕糸業を奨励し、奨励に依って10年に器械製糸会社を設立し、Ⅱ「民業自奮」を実施した。会社設立後の12年に29歳で農学校に入学し、内務省勸業寮所管の新宿試験場が廃止されたとき魯桑苗50本払い下げを受け帰郷した。13年に有志と養蚕伝習所を設け宇和島製糸会社を創業した。「繰糸の業開げざれば生糸粗悪」であり「養蚕改良を謀らんとして」修維社を60余名と開設したと報告した（M13.7.24）。座繰製糸の限界を痛感し、22年に蒸気機関製糸の県最初の南予製糸会社を設立し社長となった。

★菅淳（英治）は、美作地方産業の発展に尽くした知事であった。北条県（岡山）の出身で明治8年入学した卒業生①で、9年に寄稿した。6年に美作地方で徴兵令反対を叫ぶ「農民騒動」が起き、副戸長の菅の家屋も打ち壊しにあった。「豪農層は二派に分裂し、…襲撃された豪農層は、総じて寄生地主的側面を濃厚にもった（内藤, 1955, p.485）。打ち壊し後、農民との関係を考え直し学農社に入学し、美作地方産業の発展を「愛国の志操」から進めた。後に、懸属内務部長心得や県知事になった。

(ニ) 生活基盤の整備で Ⅴ農民の「生活向上」

★田沢実入は、新潟の出身で庄屋の家に生ま

れ、卒業生①で、明治12年に新潟の郡書記に任命された。14年には、幕末に父が訴えたのに続き「信濃川治水論」を発表し、15年に「信濃川分水会社」を設立した。16年に新潟県議会議員に当選し、分水実現のために東京へ請願に赴くなど私財を投じて活動した。19年に議員を辞職し、26年に内務省に入所し42年から開始された分水工事に携わった。

(ホ) IVキリスト教的社会改良を

★海部忠蔵は、I農学校で英語を教え、内務省勸農局に務めた。明治20年には、「普連土女学校」が、津田仙の邸内にあったコサンド夫妻の住宅を仮校舎とし開校すると、コサンドより聖書を学んだ海部は、初代校長に任命された(『普連土学園百年史』, 1987, p.9)。

★平山武知は、鹿児島生まれの卒業生①で、鹿児島県吏となり明治9年と11年に寄稿した。13年、公務で上京したときキリスト教野外大説教会に出て感動して受洗し(『日本キリスト教歴史大事典』, 1988)、IVキリスト教伝道者となることを決意した。宣教師ヘンリー・スタウトの許で神学を学んだ瀬川浅が、11年に教師資格をとって長崎に戻り鹿児島に派遣された。平山は瀬川に出会い、平山も長崎のスタウトのもとで個人的に神学教育を受けた(坂井, pp.63-4)。その後、東山学院で学び神学部を卒業し、27年に熊本、30年には台湾に派遣され伝道を行った。

★西森拙三は、高知県に生まれ、明治元年に東京に上り、昌平大学で皇漢学を学び、7年故郷に帰り小学校助教となった。9年入学の卒業生①で、民権運動に関わり、II「民業自奮」の「自由を重し」を求めた。10年に立志社による最初の政談演説会は彼の家で開催され、14年から仮編集長として植木枝盛と『高知新聞』を発行し、たびたび重禁固を宣告された「最多の犠牲者」であった。18年5月、高知教会でIVキリスト教を受洗し、伝道に尽力した。18年に上京し、20年保安条例が公布されると、21年に北海道に渡り函館教会で伝道をした。41年に野付牛(現北見市)に移住し、北見教会の前身を開いた(丸山, p.71)。

3 地域で繋いだ読者②③の活動——II「民業自奮」を中心に

II「民業自奮」を基点に、読者②③は、(イ)会

社を設立し、たびたびIII「多利ノ農業」をもとに設立した。(ロ)産業基盤の整備を、また、(ハ)生活基盤の整備を、民間が、また、市長・官吏が推進した。(ニ)身近で小さな地場事業を起業し、(ホ)「自奮」や「自由」に力点をおいて活動した。

(イ)会社の設立で

★高野積成は、山梨の勝沼に生まれ、製糸工場とぶどう栽培の先駆者として活動した。「幕末期からぶどう栽培専門家篤農家として」(上野, p.145)早くから知られ、同時に、慶応2年(1866)から蚕種製造に手を染め、明治7年には36人練りの製糸工場を郡内で初めて完成させた。10年祝村葡萄酒醸造会社の設立では株主となり、11年に津田から購入した米国産の葡萄苗の栽培に着手した(並松, p.105)。13年には、醸造会社とは別に興業社を設立し社長となり、大量のぶどう苗を買い有志者に分配し栽培を奨励した。10年代の読者②であり、その後も葡萄栽培とワイン醸造に尽力し、30年に山梨葡萄酒株式会社を設立したけれども、40年には解散に至った(上野, p.182)

(ロ)産業基盤の整備を推進——民間で

★堀内良平は、山梨で生まれ、甲府への鉄道敷設と甲府財界の勇として活動した。堀内の家は、「代々、広い畑と養蚕に用いる桑畑、染め物に使う藍畑」(塩田, p.34)を有し、藍栽培を通じてIII「多利ノ農業」を経験していた。明治16年に役場に勤めたが19年に退職し地方の私塾で学び、さらに学ぶため東京に出た。20年代の読者③で、藍の栽培が甲州で普及するなか記録を集め「山藍新説」を26年に寄稿し、30年に『山藍新説』を出版した。人脈を活用し御料林払い下げに成功し、桑畑や藍畑で蚕種会社を共同で設立した(塩田, p.108)。

明治35年、堀内は、大量の滞貨を抱えた甲州葡萄酒会社から資本と経営参加を求められ(塩田, p.112)、II「民業自奮」をワイン製造で開始した。38年、日露戦争後に軍からの大量注文で立て直した。43年、山梨と富士市に鉄道敷設を企て(現在のJR身延線)、昭和3年に開通させ、大正元年には鉄道馬車の富士鉄道を買収した(塩田, p.173)。8年に東京初の乗合バスを興し、産業基盤の整備でII「民業自奮」に貢献した。12年の電力を国家管理とする「日本発送電株式会社法案」には、自由主義の立場から反対した(塩田, p.361)。

★小笠原鶴太郎は、徳島に生まれ、明治13年に、「農談会」と「種子交換場」を有志と設置した。「農事モ又改良進歩ノ必要」と「植物試験」をめざしⅢ「多利ノ農業」を進めた(増田, p.241)。10年代の読者②で、Ⅱ「民業自奮」を産業基盤の整備で進め、28年に徳島鉄道会社発起人となった(増田, pp.246-7)。

★中野致明は、旧佐賀藩家老の家に生まれ、維新後、士族女子授産の厚生舎長として養蚕、蔬菜の栽培などを奨励した。実業界で活躍する前、明治15年に寄稿した、10年代の読者②である。16年から旧藩主が関係する第百六国立銀行の支配人になり、40年に広滝水力電気社長を務め、34年には馬力を利用する佐賀馬車鉄道の発起人となり(小川, p.117)、Ⅱ「民業自奮」を、「自奮」よりも産業基盤の整備で進めた。

(ハ) 生活基盤の整備で——官吏・市長が実施、民間が実施

★清岡等は、清岡行三の息子で、明治15～27年まで岩手県庁に勤務した。勤務を始めた15～16年に寄稿した、10年代の読者②である。27～34年に盛岡市長を務め、盛岡高等農林学校を創設し、卒業生①玉利喜造を校長に招いた。35年の衆議院選挙に市長を辞して出馬し敗れた後、彼の推薦派の後押しで37年創設の盛岡電気の社長に就任し(『盛岡市史 第7分冊』, 1962, pp.350-7)、Ⅱ「民間自奮」を産業基盤の整備で進めた。

★清岡行三は、盛岡の生まれで、明治3年に秋田県庁に属し、9年に3名で発起人となり、勸業の途に従事せんと全県的な農民の結集を目指す「勸業義会社」を発足させた。10年に勸業義会社を報告し(M10.7.15)、13年まで寄稿した、10年代の読者②であった。10年に秋田県庁を辞し、3名で秋田織物株式会社を設立し社長となってⅡ「民業自奮」を進め、13～16年まで経営した。けれども会社は倒産し、盛岡に帰郷し失意のなかで病死した。

★橋本幸八郎は、岐阜県東部の恵那郡に生まれ、家は味噌溜醸造業、質屋、銅鉄売買業を営み庄屋などを勤め、以前からⅡ「民業自奮」を実施してきた。明治9年に生糸が高値を呼び、先代は、明智に製糸業を起そうと名古屋から鉄板を馬の背で運び、50人蒸気繰り製糸を始めた。幸八郎は、7年に明智村副戸長となり、11年には明智病院を設立した(『明智町誌』, 1960, p.441)。16年

には、製糸業と恵まれた水を利用し、蚕のさなぎを餌にした養鯉を報告した、10年代の読者②であった(M16.3.10)。

明治23年には、先代の道路改修事業を継いで道路改修を終え、名古屋—明智の交通が便利になった。38年、初代明智町長になると、町有林の維持整理を町が行い、積立金と町有林の売却で工費を賄い「町営水力発電所」を建設し、安い料金で電灯を灯せた(『明智町史』, pp.440-1)。41年には小学校改築を「有志と行っていた校舎積立準備金」で実施し、中央線瑞浪駅設置に尽力し、Ⅴ町民の「生活向上」に創意に満ちた方法で貢献した。

★長坂又兵衛は、明治元年、秋田の増田(現横手市)の養蚕農家に生まれ養蚕業を継続し、Ⅲ「多利ノ農業」を行った。20年代の読者③で、野田や銚子の製造元を見学し知識を得て、12年に醬油製造しⅡ「民業自奮」を始め、36年には町内の有力者の合意を得て合資会社長坂商店を設立した。41年にはボイラーを設置し、その蒸気を大豆の蒸煮に用いて機械化を進め、自家発電で店頭で電球をともした(『増田町郷土史』, 1972, pp.417-8)。家業の養蚕業は続け、『桑樹春切仕立法』(1901)を公刊した。43年に増田水電株式会社を設立し、Ⅴ農民の「生活向上」に務め、増田に電燈をともし県南全域に供給した。

(ニ) 身近で小さな地場事業の起業で

★西掘弥市は、岐阜市の南西、生津(現瑞穂市)、庄屋の家に生まれ、この地は長良川と糸貫川が流れる低湿地帯で、「頻年水害を被ってきた」(『濃飛偉人伝』, 1933)。「馬鈴薯は水害ある地域に」を寄稿した(M21.8.25)、20年代の読者③である。明治21年に福知山城跡の柳栽培を見て、村の湿地に役立つと柳の苗木を購入し順調に成果をあげ、多くの人も柳栽培を始めた。西掘はⅡ「民業自奮」を柳行李の製造で進め、28～31年に「原産地から製造教師を雇い」、伝習所を建て奨励に努めた。

★鈴木菊次郎、愛知県豊橋で生まれ、父は大工で家は「貧困を極めていた」(『東三河産業功労者伝』, 1943, pp.392-3)。大工の棟梁となり、妻は小物問屋を商い副業に「飴菓子の類を作って販売した」。20年代の読者③で、「はっかの栽培・製造法」を問い寄稿した(M27.12.5)。明治33年伊勢神宮参詣でみた機械をもとに、独自の晒飴製造機を作り、Ⅱ「民業自奮」を始め大いに成功した。

35年には廉価な外来碎米を使う製鉛業に成功し、41年にも、固形の「翁鉛」を製造し、長期保存ができて人気を得た。鉛製造は「田原地方の四産業」となった（『功労者伝』, 1943, p.385）。大正3年には、ゼリー（後に命名）を製造し、鉛を包むオブラートも開発した。6年にオブラートの特許権を東京の企業に譲渡し、医療用として全国で使用されることになった。

(ホ)「自奮」や「自由」に力点を置いて活動

★小岩井宗十は、長野県島立村（現松本市島立）で生まれ、生家は「比較的富裕な農家で、水田耕作のほか養蚕、繭仲買を生業」（上条, p.129）とした。明治13年、国会開設要求をスローガンに発足した「奨匡社」に参加した。自由民権運動に参加し、Ⅱ「民業自奮」、とくに、「地域の自立、自治」を追求した。21年から県庁分県運動が始まり、22年に島立村役場の書記となった。21～23年に寄稿した、20年代の読者③であった。

宗十は、県庁の据え直しを演説し、演説会後に聴衆による投石事件で逮捕され、明治25年1～3月は獄中にあった。無罪となり復職したが26年に辞し、27年の日清戦争後にも普通選挙獲得運動に参加し自由を求め、35年にはアメリカに「自由の天地」を求め、家族を残し移民した（上条, p.135）。

★猪狩敏雄は、神官で、福島県双葉郡の、数少ない民権家の1人であった真琴の父親である。家は代々、楢葉神社の神職であり、神官の傍ら寺子屋を開き、有数の旧家で小作田と25町歩の山林をもつ富裕な暮らしであった（高橋哲夫, p.345）。明治20年には「上等の水田と桑畑の収益比較」（M20.5.5）を寄稿した、20年代の読者③である。真琴は、河野広中の「石陽社」に学び、福島事件後も16年に県会議員に当選し22年まで在任した。

★武藤幸逸は、群馬県山田郡の生まれで、家は明治元年に名主であった。県会議員を12年頃に務めた。7年には河野広中らとともに「民選議院設立の建白書」を提出したけれども、政府の回答はなかった。政府が無視できるのは「人民の元氣」が振るわないためであり、「人民元氣」は「農工商ヲ振興」にありと考へ（井上国雄, p.640）、Ⅱ「民業自奮」を追求した。武藤は、津田の主唱した排水溝を10年代の初めに荒蕪地に作った（井上国男, pp.646-9）。20年代の読者③であるけれども、10年代の活動を克明に伝える（M24.9.25）。

11年に農業試験場を開き、学農社より「西洋葡萄苗を得て」栽植し、3年後に結果し試売したが、嗜好するものは少なかった。14年に下総種畜場を見学し西洋農具の威力を知り、「欧米新式の鋭利なる器械」を用い、Ⅲ「多利ノ農業」を進めた。このころ山田郡では、新興の足利機業に小作人が吸収され小作人の土地返還がおき、武藤も所有地を手作りせざるを得なかった。

★橋本伝右衛門は、福島で田畑と山林・宅地を合わせて43町をもち、明治16年県会議員のなかで第2位の資産を有した改進黨の議員であった。Ⅲ「多利ノ農業」を、6年以降始めた畑作大農場経営で進めた。10年に羊35頭を購入したけれども、羊の死、労賃の騰貴、生産物市場の欠如で失敗した。西洋野菜を栽培し、桑や茶など商品作物農業を試み、洋式農具を買い入れて畑作大経営を行い、羊豚を使った有畜農業も行った。津田の主張に共鳴した10年代の読者②であった。

4 地域で繋いだ読者②③の活動——Ⅲ「多利ノ農業」を中心に

Ⅲ「多利ノ農業」を基点に、読者②③は、(イ)果実や玉ねぎの栽培を、先駆者として実施した。(ロ)牧畜業を各地で開始し、原料栽培を回復させた。(ハ)養蚕業や製糸業、製茶業を拡充し、(ニ)伝統的な技術改良と「学理的農業」を実施した。報徳社の創設や多数の稲作改良書の出版となった。

(イ)果樹栽培の先駆者として

★田村昌八郎は、愛媛県松山の沖にある興居島村で、暖地リング栽培の先駆者である。明治16年に県勸業課が水蜜やリング苗数種を配布すると試作し、「技術・知識の共有」を求め23年に東北地方を視察し、翌24年に苗木を導入栽培した。20年代の読者③で、29年に寒地栽培を知るため弘前の菊池後週園を訪ねた（後述）。菊池は、「初めての面会なれど、一見旧知の如し」とし、彼の「技術は巧みで、将来は一大特産地になる」（菊池, pp.45-6）と書き残した。30年代には、暖地リングの特産地で中心的役割を果たした。

★菊池楯衛は、弘前藩の士族出身で、明治10年に北海道の勸業試験場で果樹栽培の技術を研究した。希望者が増え自家繁殖のリング苗の販売では足りず、「明治12年東京学農社から1500本、三田育種場から3000本など」（波多江, p.436）を取

り寄せ販売し、その後、著名なリンゴ園主となった。10年代にI学農社の苗木販売に応えた、20年代の読者③であった。

★池本文雄は、明治18年に「樹陰に植えるべき植物の種類」(M18.1.10)を寄稿した、10年代の読者②である。27年に官吏を辞し故郷に戻り、「淡路島を拠点に日本国中を果物王国」にと淡路の有志を説き、『果物雑誌』を創刊し、当初の千部から数千部に増えた(田村, pp.248-50)。読者の萩尾徳太郎も加えて、日本果物合資会社を設立した。

池本の他にも淡路島の読者は多く、明治20年に兵庫県の読者8名のうち4名、25年には30名のうち13名を占め、年に複数回、それも数年にわたり寄稿した。賀集久太郎も広田孫彦も著書を出版し(第2図参照)、他に10年代の読者②は賀集新平など6名で、20年代の読者③は政所富太郎など計19名であり、なかでも25年から急増した。

★中村正路は、萩市に生まれ、養蚕指導者で伊予カンの発見者であった。明治初年ころより養蚕業に着目し、先進地を視察し技術を学んで自宅の傍らに養蚕伝習所を設けた。19年には、農園で偶然、実生の「穴門ミカン」を発見し、22年に苗木が愛媛に植栽されて普及し、25年「伊予カン」と命名された(『たべもの起源事典』, 2003)。20年代の読者③で、「明治・大正期を通じ、県を舞台に養蚕授産事業と技術指導に活躍した」(萩市郷土…, p.152)。25年には朝鮮から亡命した宋秉峻が中村を訪ね、43年の韓国併合の後、朝鮮半島北部でリンゴ果樹園等の農場を経営した。大正8年には、萩の実業家と山口初の製糸工場を設立し、II「民業自奮」を進めた(萩博物館)。

玉葱栽培の先駆者として

★坂口平三郎は、岸和田に生まれ、明治10年に「東臯園」を設け、内外の園芸蔬菜や果樹を試作し「泉州玉ねぎの祖」とされる。12年に神戸でステーキに添えられた玉ねぎを食し、外国商館から譲り受け栽培した。14年10月には「東臯園」で播種の記録が残る(『岸和田市史 第4巻』, 2005, p.130)。14年に大阪府から勸業委員を依頼され、玉ねぎが有利なことを説き種子を配布し勸奨行脚した(南野, pp.37-9)。17年から本格的な栽培が始まり、外国産綿の輸入で綿栽培が減少するなかで玉ねぎは換金作物として注目された。20年代の読者③で、「玉ねぎ栽培法と収益表、種子分与」を報告し、「質問せらる」少なからずと続

けて報告した(M24.10.5, M24.11.15)。『農業雑誌』を通した「技術・知識共有」の具体例である。

明治24年に寄稿した、20年代の読者③川越誠吉は、21年創立の「大阪農学校生」であり、38年には『玉葱栽培全書』を公刊した。

(ロ) 牧畜業の開始と原料栽培の回復で

★飯田康雄は、静岡県東部、「田方郡南部における畜牛改良の必要を称賛せし元祖」3人の1人であった。この地は東北地方より馬を買い付けており、「馬商に利益を襲断され、農家の蒙る損耗少なからず」と牧畜業の必要を説いた。明治21~22年に「家畜なければ農事なし」と寄稿した、20年代の読者③である。飼育を勧め資金の乏しものには畜牛や資金を貸与したが、「効を奏せず」に終わった。38年には畜牛信用組合を設立し、同組合は利益を得て組合員も増加し養牛熱も高まった(『静岡県田方郡誌 3下』, 1972, pp.290-2)。生乳を花島練乳場に供する団体を共同で作し、牧畜業を発展させた。大正13年には『五十町歩以上ノ大地主』(農務局)の記載では、所有地は田6.9町、畑45.7町、小作戸はなく成牛の出荷に従事した。

★知識兼雄は、鹿児島において明治4年、吉野牧を譲り受けて「牛乳製造所」を作った。「搾乳業のため乳牛繁殖と放牧の必要」から8年に牛馬の改良組合「農事社」を設立した(上岡, pp.95-6)。しかし、西南戦争で「施設・農具は破壊され」同社は壊滅し、12年に三田育種場に遊学した(M12.12.25)。「農事社」は12~15年まで『農業雑誌』の販売所であった。11年に授産資金借入で再出発し、「農事社」は16年には120頭を飼育したけれども(上岡, pp.110-2)、20年頃には実質的に瓦解し39年に解散した。

★安井好尚は、島根県大田(仁摩町)の大地主で、明治3年「養蚕の業を起し、県内蚕業の嚆矢」となり、7年には「信州より桑苗一万株を購ひ無料を以て近郡の有志に配布」した。また、三瓶山で牛の放牧も始め、12年には三瓶山の牧場を拡大し、「殖牛社」を設立した(『実業人傑伝 第4巻』, 1895-8, pp.152-5)。10年代の読者②で、23年には県会議員であった。V農民の「生活向上」を、生活基盤の整備で進めた。8年に子弟教育のため「他郷に率先」し多額の資金を投じ「宏壮なる一大校舎」を新築した。19年の中学校令によって閉校されると、21年に私財を投じ大田英和学校

を開校し、修業年限3年の英語による普通教育を29年まで続けた(内藤, 1975, p.220)。

★茅原鐵蔵は、明治16年34歳で農業を志して上京し農学を修め、17年佐渡に帰り農業改良を説き、私立試験場も設置した(『越後人物誌 中巻』1972)。17年には、藩閥政治を批判した星亨の政談演説会が新潟で開催されると、茅原は参加し(風間進編, p.12)、Ⅱ「民業自奮」に自由民権運動で関わった。18年、「佐渡牧畜会社」を設立し、I学農社の牧畜論を実施した。20年には、佐渡で最初の月刊誌『北溟雑誌』を知人と発行し、26年まで郡内視察の見聞を掲載し牛馬耕を郡内に取り入れた。『北溟雑誌』とほぼ重なる19~24年に寄稿した、10年代の読者②で、32年に牧畜会社は解散した。

原料栽培の回復で

★初瀬川健増は、福島に生まれ、幕末に会津藩蠟漆木取締役であった。維新後に漆樹は保護がとられ伐採で減少するなか、会津漆器業に必要な漆樹の振興に尽くした。明治20年に『漆樹栽培書』をまとめ、海外での万国博にも出品し、31年に清国湖北省に漆樹調査を行った(福島県, pp.257-9)。20年代の読者③で、「会津漆栽培家」として報告した。V農民の「生活向上」を、学校新設や吊り橋改修など生活基盤の整備、地租修正運動や国有林の民有林野引き戻しなどで進めた。

(ハ) 養蚕業や製糸業、製茶業を拡充で

★倉次亭は、「旧佐倉藩大参事であり、帰農し」(M20.1.25)、明治4年に同志22人と千葉県で佐倉同協社を結成した。払下を受けた荒蕪地を5年から開墾し、茶種から茶樹を育て茶園とし製茶を行った(『佐倉市史 巻3』, 1979, pp.572-3)。8年に初めて茶を摘み、「創業の十余年後(10年代末に該当)には事業も確立した」。20年代の読者③で、掲載された「養豚の利」を社会員が読み「牧畜の業」を事業規則に追加したと、「貴社雑誌の効力と深謝」し寄稿した(M20.1.25)。大正期には小作料が主な収入源となり、霜害や火事で9年に解散した。

★鶴岡造酒右衛門は、千葉県酒々井町の人で、明治15年頃、酒々井町を中心に蚕業興隆のため養蚕伝習所「蚕魁社」を設立し、(『佐倉市史 巻3』, p.367)。25年には、千葉で「器械製糸の嚆矢」となる器械製糸工場を建設した。多数寄稿した10年代の読者②で、37年には「区区たる製糸

業の不利益を認め、富岡町の甘楽社に加盟」し支部とした(鶴沢, pp.281-3)。10年代の読者②須合正左衛門も幹事として加わった。

★田島武平は、田島家の本家であり、明治2年に名主となり、私塾を開いて育栄に力を注ぎ(『群馬県蚕糸業史下』, 1956, pp.871-2)、V農民の「生活向上」に尽くした。明治2~6年は「蚕種業界の華やかな黄金時代」となったけれども対策が必要と判断し、渋沢栄一の指導で5年に島村勸業会社を設立した。7年には山形県からも元藩士16人は約3ヵ月、分家の弥平らのもとで養蚕を学び、山形でも桑畑が造成され盛んになり、弥平らは「技術・知識の共有」に務めた。10年には学農社通信員の湯浅治郎(後述)が、「群馬県随一の蚕種家、田島の蚕種製造法」を報告した。しかし、17年には不況のため島村勸業会社は解散した。弥平の弟の定邦は20年代の読者③で、『養蚕真宝』(明治21年)を出版した。

★佐々木長淳は、福井の生まれで、明治6年にはウィーン万博に津田仙と同様に派遣され、帰途各国を回り、顕微鏡を用い検定し病蛾の卵を除く、最新の養蚕技術を習得した。9年に勸業寮の養蚕掛と(群馬県の)新町紡績所長となり新町紡績所は10年に開業した(「よみがえれ…」, p.13)。16年に「製糸器械の説」を寄稿した、10年代の読者②である。

★岸喜平治は、群馬の渋川で「桑苗園」を営み、I学農社と密接な関連をもつ、10年代の読者②であった。養桑生産と販売を主とした豪農の家に生まれ、自らも蚕種を製造し、年間3万本もの苗木など販売する商品作物製造農家であった。「明治14年に『農業雑誌』を得て、養蚕は良桑を得るを先」と「桑苗園」を設け、数万の苗を養い水戸に2万本送り(M16.2.24)、また、15年に投書みて「蚕種を石見国や岡山から請われた」とし、「これは『農業雑誌』の媒助」によるとした。「津田先生の厚志を慕い、此農業を大にせん」と記し、津田も岸を「篤志家」と呼び、「氏の篤志感佩すべき哉」と応えた(M16.2.24)。

★竹内泰信は、長野県南安曇野の生まれで、家貧しく幕末に「資産はついに傾き」、明治維新では東京に出て苦学2年余、明治3年帰郷し皇学塾を開き敬神の道を唱導し神職に任された。7年小学校教員となり「松本新聞」に寄稿し、才能を認められ同新聞の主筆に迎えられた。Ⅱ「民業自奮」を自由民権運動に求め、長野で松沢求策たちが組

織した自由民権の「癸匡社」に加わった。

元来、「農業の趣味あり」、「津田仙に親炙」した（『南安曇郡誌』, 1923, pp.1002-3）。勸業を志して明治13年に「興産社」を設立し、種苗を勘農寮から得て試作した。16年に一連の事業は困難となり中止した。その後、下高井郡の書記や県会議員となり、南北信での税の公平を唱え蚕業発展に貢献した。20年代の読者③で「秋蚕飼育法」を寄稿し（M21.8.15）、晩年は郡の秋蚕種を全国に紹介した。

★畠山久左衛門は、秋田県の六郷町に生まれ、53.4町を有する地主で農業の改良と副業として養蚕振興に尽力した。明治22年、初代六郷村長に選ばれ、後に町長となって、V農民の「生活向上」に努め、「地方自治の発達を図り、学校の新築、道路の改修、養蚕製糸の奨励、衛生組織、基本財産の増産に尽くした」。34年に再び町長となり、「50万本の植林を企て、生前その半分を植え」植林に熱意を傾けた（『秋田人名大事典』, 1974）。36年に六郷製糸会社を興しII「民業自奮」を進め、改良座繰製糸機械を導入した。

★佐藤伝平は、代々「呉服商」の家に生まれ、これを廃し養蚕業を望み、「荒蕪地20町歩を桑園にせんとし払い下げられた」（高橋信貞, pp.157-8）。明治15年に「蚕寿万館」を若松に設立し、技術を農民に伝えた。10年代の読者②で、18年農民の窮乏を訴え若松愛林社を設立し、農民のため稲の改良を行い、V農民の「生活向上」に貢献した。

(二) 伝統的な技術改良で「学理的農業」を実施

報徳社の設立で

★岡田良一郎は、静岡、掛川藩の大庄屋の家に生まれ、報徳主義として掛川農学社本社を設立した。県会議員であり、田45町3反、畑10町2反、小作215戸、手作り1町5反を有した。水田単作地帯で原料作物の導入を積極的に行い、III「多利ノ農業」に意欲的で、蔗栗実験を委託され、I津田と親交を有した、10年代の読者②である。植林事業に注目し、水利施設や開墾を含んだ土地改良事業で、V農民の「生活向上」に務めた。

★中村和三郎は、静岡県西部の、後の気多村に生まれ、天宮神社の宮司であった。明治15年に北周報徳社、16年に北遠農会を設立し、報徳精神に基づき農業の普及を目指した。「農具・種苗・他の農事改良に熱心で」、農民を誘導し農事改良の

輪を広げた（『春野町史』, 1993, pp.53-5）。22年に初代村長となったけれども23年に辞任し、雑誌『農談』を創刊し各報徳社を紹介した。『農談』創刊前の19～22年に50回以上寄稿した、10年代の読者②であった。

伝統的な技術改善で

★酒井為太郎は、茨城県に生まれ、「農業教育の普及を以て己が任」と、農事改良策として農業教育の必要を説いた。10年代の読者②で、梗米を試作し結果良好なものを分与し、稲試作結果を記した「小冊子二百部」を配布し、III「学理的農業」を進めた。品評会を開催し作物品質の優劣を農民に論じさせ、試作地を設け村民に授ける所を知らしめた（『全国篤農家列伝』, 1910, pp.98-102）、津田の唱えた「隠微なもの」を農民に伝えた。

★佐久間義隣は、福島県双葉郡で生まれ、伝統的な農業指導者であった。庄屋を務め幕末に引退するまで「村治に与り」、養蚕や水車稼ぎのほかに質屋も営んだ。「田畑の開墾、桑苗の仕立など養蚕の改良、稲作の改良、植林」に従事した（『川内村史 第1巻』, 1992, pp.467-9）。10年代の読者②で約50回寄稿した。

5 地域で繋いだ読者②③の活動——V農民の「生活向上」とIV「キリスト教的社会改良」

(1) V農民の「生活向上」を中心に

V農民の「生活向上」を基点に、読者②③は、(イ)北海道移民、海外移民、開拓を実行し、(ロ)「生活基盤」の整備を推進した。

(イ)北海道移民、海外移民、開拓で

★加藤平五郎は、愛知県南部の現・碧南市に生まれ、北海道開拓を行った。明治16年に郡内の豪商で地主の岡本八右衛門の番頭となり、豪商の事業として現在の西尾市や安城市の原野を開墾し、20年には34町歩の開墾に成功した（碧南市…, p.5）。20年代の読者③で碧南から寄稿した（M27.1.5）。28年には岡本の意で19人と入植し、「民と共に自ら鋤を振るい」、1千町歩という広大な原野の開拓に成功した。30年に三河にちなみ三川停車場（夕張郡由仁町）の開設に務め、31年に三川簡易教育所を開いて教育に力を入れ貧困者の子弟に弁当を与え出席を励ました（碧南市…, pp.115-7）。排水路を開削し橋をかけ、ため

池をつくるなど、生活基盤の整備を進めた。大正13年に、『五十町歩以上ノ大地主』（農務局）の記載では、田21.4町、畑329町を所有し、小作0.4町で小作戸数70戸であった。

★長嶺忠司は、盛岡藩の重役で、「日本近代製鉄業の創始者」とされた大島高任とともに、版籍奉還後の明治2年、盛岡藩の「勘定奉行」、後に「権少参事兼会計権督務」を任命され、盛岡藩家中8800人の転地を行った（半澤, p.330）。その後、「北海道開拓の志望切なりといえども、家に家計なく身に暇日なく」であったが、20年に実況を見聞し、19年制定の土地私下規則」もあり、「今や時勢熟し、時期を失いざらんことを切望す」と寄稿した（M23.2.15）。20年代の読者③で、津田は長嶺を「藩制の頃は土木の公事に興り頗る経歴のある人」と紹介文を付した。

★日野久橋は、北会津郡生まれで、明治20年、登別の南西にある幌別に仙台藩片倉家の主従として北海道開拓を行った。登別の北西にある社台村に牧場地を貸与され馬匹の改良と繁殖に努めたが、失敗し26年解散した（白老町, 「しらおい再発見」, 2017）。20年代の読者③で、解散直前の25年に問いに答え「北海道の開墾費について」を寄稿した（M25.3.25）。旧家臣の養父は、入地後、19年に登別川上流でカルルス温泉を発見した。32年に市田重太郎が温泉経営許可を得たけれども、「莫大な費用がかかるため、地元で事業に成功」（「こうほう登別」, 1999, No.588）した久橋と共同で、32年後半にカルルス温泉郷の経営を開始した。その後、久橋は経営全権を譲り受け、Ⅱ「民業自奮」を温泉経営で進めた。

開拓で

★細谷直英は、幕末期の仙台藩士で十太夫として知られ、戊辰戦争では黒装束を身にまとい、偵察方としてかつて交流のあったヤクザの親分衆を束ねて、「勇名を轟かせた仙台藩の鴉組隊長」（『石巻市史』, 1962, 巻4, p.99）であった。大赦令発令後、しばらくして北上運河の開削工事の夫役監督となり、湿潤な牡鹿原を開墾すれば、「有望な農地」になると県令に進言した。10年代の読者②で、「気筒法実験」（M10.4.15）は西南戦争のなかで掲載された。明治10年の西南戦争で功績をあげ、13年末に牡鹿士族開墾場が開設され初代場長に任命された（『石巻市史』, 巻4, pp.99-103）。米穀や生糸の売買で三井組の支店主任から「東北屈指の富豪」となった戸塚貞輔は、細谷の開墾事業

を「称賛すべき」として、13年末には所有する約40町歩を開墾地に利用との条件で政府に奉納し、14年に士族43名が移住した。

国外移民で

★照井亮次郎は、明治27年に宮城農学校に入学し、入学直前の26年に寄稿した、20年代の読者③である。30年に榎本武揚の「殖民の企画に賛同し」、「海外殖民の成功を示し国民の自信を強からしめる」との「殖民の初志」（川路, p.172）をもち、メキシコ南部チアパス州、榎本殖民の地に照井ら自由渡航者6人など28人で入植した。しかし、メキシコ政府譲渡地のうち山岳部のみが日本人に残され、「役にも立たない山ばかりを多く買入れたのはいかにも迂愚の極み」（照井）で、5年後に崩壊した（川路, p.163）。39年、日墨協働会社を設立し、経営は順調であったけれども、43年からのメキシコ革命で大正9年に解散した。

(ロ) 生活基盤の整備で

★鈴木三蔵は、岐阜県の老農で足軽の家に生まれ、明治7年には近江から牛耕技術を導入し、14年に東京の勸業博覧会で見た持立犁を持ち帰り使用を奨め馬耕を普及させた。Ⅲ「学理的農業」を勧め、「農事の実施指導には理論研究を伴うべき」と、新聞・雑誌などの新知識を吸収し、「津田仙や中村直三などについて所説を伝習した」（紀田, pp.242-3）。生活基盤の整備が必要として、吊橋が急務と計画したが資金が不足し、樺を長さ半分にし街道の馬糞を集めて資金を作り30年に完成した。

★飯塚志賀は、群馬に生まれで家は代々名主であり、明治14年東上して研学し帰郷後に小学校で教鞭をとった。18年から村政に尽くし、21年村民を説き国有林野に造林を始めた。20年代の読者③で、27年に県会議員となり「実業派の重鎮」であった。「自らの160余町歩の山林原野に造林70町歩をなして範を村民に示し」（姥名, pp.116-7）、「多額の費を出し道路の改修に務め」、Ⅴ農民の「生活向上」に貢献した。41年、村民と桜と楓を山頂に植樹し桜の名所となった。

(2) Ⅳ「キリスト教的社会改良」を中心に

Ⅳキリスト教的社会改良を基点に、読者②③は、3つほどの主体に分かれて社会改良や生活基盤の整備を実施し、受洗の経緯にも相違が見られる。(イ) 豪農が推進し、(ロ) Ⅲ「多利ノ農業」

(及びⅡ「民業自奮」)の推進者も推進し、(ハ)幕臣が、キリスト教の活動や社会改良を行った。この活動を進めた二人の卒業生①がいた(既述)。

(イ) 豪農が推進

★湯浅治郎は、群馬県安中の豪農・豪商で帯刀御免の御用商人の家に生まれ、家は醤油味噌の醸造を業とし、傍ら蚕種の製造販売も兼ねた(『群馬県蚕糸業史 下』, 1956, p.500)。明治6年、上野尻上学校の設立に尽力した、10年代の読者②で、11年に蚕の共同飼育を開始した。11年に受洗したⅣキリスト教徒で、安中教会創設の中心人物であった。13年に生産会社同潤社を設けて社長となり、16年私立碓井銀行頭取、14年に日本鉄道会理事となり「産業基盤の整備」を進め、19年に製糸会社である国光社を創立し、Ⅱ「民業自奮」を実践した。20年には同志社大学開校に出資した。

★相馬愛蔵は、長野県の現・安曇野市に生まれ、明治20年上京し牛込市ヶ谷の牛込教会に通った。卒業後、札幌農学校で養蚕業を修め、穂高に戻り養蚕の研究に取り組み、Ⅳキリスト教の伝道などに力を入れた、20年代の読者③で、33年公刊の『秋蚕飼育法』は版を重ね5万部に達し、相馬夫妻は34年「中村屋」を開店した。

(ロ) Ⅲ「多利ノ農業」の実施者が推進

★田中敬造は、京都の国野村で庄屋筋の家柄で「村内随一の資産家」の家に生まれ、明治9年に村耕地の1割弱にあたる2町2反余をもつ大地主であった。「農事の改良」に尽くし「淡路に航し」て「山麓の溜池」を見て、村に溜池をつくり村民の模範にした(『現代何鹿郡人物史』, 1915, p.74)。14年に長野県を訪ね16年に製糸業を始め、18年に生糸・真綿などを外人と初めて取引し、Ⅲ「多利ノ農業」を進めた。20年頃に見出した桑樹は「優秀抜群」をもって、津田仙が「世界一と命名」し「愛植園」の名も贈り、「20余年間、津田仙氏と親交を重ね指導を受け」(『同人物史』, p.74)、Ⅰ学農社と繋がりを有した。

田中は明治19年、愛媛県に出かけ偶然キリスト教の「演説会」を聞き、「俄に求道の志を起し」(村島, p.6)、帰村し村内有志家に熱心に伝えた。19年末にⅣキリスト教の伝道を依頼し田中宅で説教会を開き、20年に妻とともに受洗した。20年以降、田中に代表される自作上農層は、松方デ

フレ政策と、商業資本(寄生地主)の進出で次第に没落し、所有地は23年に半減した。22~24年に5回寄稿した20年代の読者③であった。

田中は、北海道に転任した牧師の勧めもあり、失意のなかで明治26年には旭川に移住した。将来の発展を見越し機械製材を企て機械数台を据付け、Ⅱ「民業自奮」を進めた。『北海道の隆運』(1910)は旭川の著名な商人48人を挙げ、田中も「木工および農」、開業は25年とされる(吉田, p.27)。製材業は成功し、40年には工場を新築し機械も新調し大正初期には旭川の大地主となった(吉田, pp.75-6)。35年には議員などを務め、公共事業に寄付し44年には「旭川基督教会移転費中に金壱円」を寄付した「篤志家」であった(『同人物史』, p.76)。故郷ではⅢ「多利ノ農業」、北海道ではⅡ「民業自奮」を進め、いずれでもⅣキリスト教的改良運動を進めた。

(ハ) 幕臣で、キリスト教の活動を実施

★今井信郎は、幕末には京都見廻組の隊士で、上層部からの指示により坂本竜馬を襲った。明治元年に、戊辰戦争で敗北した後、榎本武揚とともに北海道に海上上陸した。3年に禁固処分を受け静岡県に引き渡され、5年に西郷の特赦により放免された。今井は、静岡学問所の教授に招かれたクラーク(後の札幌農学校長)の護衛役に任命され、クラークを通じてⅣキリスト教に出会った(井上勲, pp.103-4)。静岡学問所の跡地に私立学校を設立したが、「明渡しを要請」され献納した(大坪, p.298)。静岡県庁に出仕し、西南戦争では「討伐隊として向こうに着けば」、西郷軍に加わろうと出征し、途中で西郷軍の敗北を知った。

今井は落胆し、津田仙を師とし農業に生きる決意をした。明治11年に静岡県牧の原、現島田市に妻と二人で入植し、津田の指導を受け茶の栽培や果樹栽培などを始めた。津田にならい「三養社」(教育・勸業・経世)を設立し、綱領に「自由・独立」を掲げ、解散に追い込まれたけれども、製茶事業は茶の輸出で発展した(井上勲, pp.104-5)。17年には、旧幕臣の牧師から受洗し、Ⅳキリスト教徒として講演も行った。19年には「三養社」の分校を開校させ、その後で寄稿した20年代の読者③である。

おわりに

『農業雑誌』の読者は、新たな社会にむけてそれぞれが活動を行い、これらの活動について確認できたことを、「五角形の枠組み図」をもとにまとめておきたい。

I学農社の卒業生①は、農事試験場に移動し、Ⅲ「多利ノ農業」を果樹栽培などで直接に指導し、また、地元の農学校を経て間接的に指導した（I滝七蔵参照、以下同じ）。

Ⅲ「多利ノ農業」の基点には、I学農社卒業生①の指導に積極的に応えた読者が存在し、先駆的な果樹栽培園主（Ⅲ菊池楯衛）は学農社の苗木販売に応えた。同時に、園主は先進地域に出かけ、「技術・知識の共有」を図った。とくに蚕業では良種を求めて移動し、手にした良種を無償で地元配布し栽培を奨励した（Ⅲ中村正路）。学農社が勧めた牧畜業と畑作に応えた10年代の読者②が見られ（Ⅲ知識兼雄、Ⅱ武藤幸逸）、限られた読者は牧畜業をその後も継続できた（Ⅲ飯田康雄）。これとは別に、稲作の多くの読者は、品種を交換し（Ⅲ酒井為太郎）、多数の「改良農書」を購読し、ときには著作した。

Ⅱ「民業自奮」の基点では、読者②③が、卒業生①も加えて、蚕業をもとに発展した製糸会社を設立し（I小笠原長道）、他方、身近な地場事業を設立した（Ⅱ鈴木菊次郎）。製糸会社を設立した読者は、鉄道延長による蚕業基盤の整備を求め、銀行・電力会社の経営者（Ⅱ中野致明）、村長・郡長が延長請願を行った。Ⅱ堀内（良平）は、鉄道・バスの企業を起し自ら整備した。なお、大会社の設立者には、Ⅱ「民業自奮」から離脱も考えられる（第1図、外向き矢印参照）。

Ⅱ「自奮自奮」の基点には、読者②③で自由民権を進めた豪農・手作り地主（Ⅱ武藤幸逸）、「豊かな農民」（Ⅱ小岩井宗十）、農事改良家（Ⅲ茅原鐵蔵）や、高知で「最多の犠牲者」とされた卒業生①も、「自由」や「地域の自立」を求めて集まった（Ⅳ西森拙三）。これら民権家は、その後、海外移民、北海道開拓、そして地方産業の発展（I菅淳）に向かった。

Ⅳキリスト教的社会改良の基点には、卒業生①で伝道の道に入る者、読者②③の豪農で改良運動を推進する者が集まった。異質な経歴をもつ読者もいた。旧幕臣は、キリスト教に出会い、津田を師として農業に生きた（Ⅳ今井信郎）。手作り大

地主は、キリスト教に出会い村民に影響を与え、寄生地主化に伴い没落し、移住した北海道で成功した（Ⅳ田中敬造）。

V農民の「生活向上」の基点では、読者②③は国外移民、北海道移民、国内各地で開拓を実施した。活動が確認できない多くの読者も、『農業雑誌』を読み「学理的農業」を試みたといえよう。また、生活基盤の整備を、多くが推進し、なかでも村長・市長、そして議員が各地で行い、民間事業者も行った（Ⅱ長坂又兵衛）。村の基本財産を活用し創意に満ちた方法で整備に貢献した（Ⅱ橋本幸八郎）

『農業雑誌』は、先駆的な「民間自由」の雑誌として発行部数の点でも、多数の、判明する限りで60余名にのぼる、読者の「多様で異質な活動の」点でも大きな役割を果たした。各地で展開された読者の活動は、読者の多少・増加の遅速の示す、5つのまとまりに関連づけて検討すれば、それぞれの活動が当該地域で示した代表性や特異性を示唆してくれる。

『農業雑誌』の読者に注目することで、津田仙と『農業雑誌』が希求した「農は百工の父母」と「自由を重し」を、「これこそ自分たちの営みと、濃淡はあれ共感した人々」が明治の日本社会に存在したことが確認でき、『農業雑誌』を引き寄せた、こうした読者が『農業雑誌』の広がりをも強めたといえよう。しかし、寄生地主化が進み、保護政策が変わらず、官による「農談会」を経由した農民への働きかけ（図では斜めの長い破線の楕円）が強まるとき、『農業雑誌』の広がりも弱まり、狭まることになったといえよう。

参考文献

- 青山学院, 1965, 『青山学院九十年史』
 石川県教育委員会, 1984, 『石川の農村を支えた人々』
 井上勲, 2014, 「基督教徒となった坂本龍馬暗殺者」, 『基督教論集』青山学院大学神学科教学督学会 57号
 井上国雄, 1955, 「武藤幸逸の「共農舎」農場」, 日本農業発達史調査会編, 『日本農業発達史: 明治以降における第5巻』
 色川大吉, 1966, 『近代日本の出発』
 上野晴郎, 1977, 『山梨のワイン発達史』
 宇喜多翁一刊行会, 1931, 『産業界の先駆宇喜多翁』
 鶴沢昇作編, 1953, 『千葉県蚕糸業沿革史』
 内田糺, 1965, 「津田仙と学農社」, 細谷俊夫編『人物を中心とした産業教育史』
 姥名慶五郎, 1917, 『群馬県の代表的人物並事業』
 大坪草二郎, 1941, 『国士列伝』
 小川功, 2008, 「大正期破綻銀行のリスク選好と“虚業家”

- タイトル『跡見学園女大学マネジメント学部紀要』第6号
- 風間進編, 齊藤長三著, 2005, 『佐渡政党史稿 復刻』郷土文化
- 上岡剛一, 1966, 「鹿児島県畜産史の一駒——『農事社』の事績」, 『鹿児島大学法文学部紀要 経済学論集』No.1
- 上条宏之, 1981, 『民衆的近代の軌跡』
- 川路賢一郎, 2003, 『シエラマドレの熱風——日・墨の虹を架けた照井亮次郎の生涯』
- 菊池秋雄, 1938, 『陸奥弘前洞園主菊池楯衛遺稿』
- 紀田順一郎監修, 2007, 『日本人物誌選集 第4巻 日本老農伝』
- 金文吉, 2003, 『津田仙と朝鮮——朝鮮キリスト教受容と新農業政策』
- 小池洋二郎, 1882, 『日本新聞歴史』
- 坂井信生, 2005, 「明治期長崎におけるキリスト教(覚え書)」第2部 プロテスタンティズム(2)『活水論文集』第48集 活水女子大学
- 塩田道夫, 1997, 『堀内良平の生涯——富士を拓く』
- 高崎宗司, 2008, 『津田仙評伝 もう一つの近代化をめざした人』
- 高橋哲夫, 1967, 『福島県民権列伝』
- 高橋信貞・他関, 1890, 『褒賞蘭写真表法解説』
- 田村昭治, 1999, 『ここに人あり 淡路人物誌』
- 津田道夫, 2012, 『津田仙の親族たち』
- 伝田功, 1962, 『近代日本経済思想の研究』
- 鳥取県果実農業協同組合, 1972, 『鳥取二十世紀梨沿革史』
- 内藤正中, 1955, 「自由民権運動と豪農層——美作自由党の成立」, 『経済論叢』, 76巻1
- , 1975, 『山陰の年輪』
- 永原慶二他編, 1986, 『講座・日本技術の社会史 別巻2 人物編 近代』
- 波松信久, 2013, 「明治期における津田仙の啓蒙活動——欧米農業の普及とキリスト教の役割——」『京都産業大学論集』社会科学系列 Vol.30
- 農務局, 『大正十三年六月調査 五十町歩以上ノ大地主』, 農業発達史調査会編, 『日本農業発達史: 明治以降における第7巻』1955
- 萩市郷土博物館友の会編, 1984, 『萩の歴史 3版』
- 波多江久吉, 1955, 「リンゴ生産の発達——青森県の場合——」, 日本農業発達史調査会, 『前掲書』
- 半澤周三, 2011, 『大島高任』
- 普連土学園百年史編集委員会, 1987, 『普連土学園百年史』
- 福島県, 1969, 『福島百年の先覚者』
- 碧南市教育委員会, 2015, 『碧南出身の人物伝 加藤平五郎物語』
- 増田智, 1985, 「近代成立期における地方名望家の位置 宮倉・小笠原鶴太郎の軌跡」, 『郷土研究発表会紀要』, 第31号
- 都田豊三郎, 1972, 『津田仙——明治の基督者』
- 丸山和代, 2004, 「西森拙三の生涯を追って」, 『高知市立自由民権記念館紀要』Vol.12
- 南野純子, 1987, 『泉州玉葱と坂口平三郎』
- 三宅忠一, 1963, 『岡山の果樹園芸史』
- 村島渚, 1943, 『丹陽基督教会五十年史』
- 山崎孝子, 1962, 『津田梅子』

吉田民鉄, 1910, 『北海道の隆運』

よみがえれ新町紡績所の会, 2013, 『佐々木長淳の生涯と業績』

謝辞: ほぼ50年前に津田塾大学図書館を訪ね、山崎孝子先生に資料を見せていただきました。津田塾大学に在職中にこれら資料をまとめることができないままとり、あらためてお礼を申し上げます。

